

令和7年度 友松会総会 【報告】

日時 令和7年6月29日(日) 13:30～

会場 横浜市教育会館ホール

友松会スローガン「深まろう 高まろう つながる会員 つながる大学」
～ 新しい時代にふさわしい豊かな活動を ～

＝ 総 会 次 第 ＝

第Ⅰ部 総会

開会の言葉

物故会員への黙祷

会長挨拶 実行委員長挨拶

来賓祝辞 来賓紹介 会務報告

卒寿会員紹介・祝電披露

松沢研究奨励賞贈呈

旧役員紹介、挨拶 新役員紹介

次期総会開催ブロック挨拶

「みはるかす」斉唱

閉会の言葉

第Ⅱ部 研究発表会

発表者・講師紹介

研究発表・講評

藤馬 享 会長 挨拶 (要旨)

ご多用の中、横浜国立大学学長並びに、校友会会長、梅原出様、教育学部長鈴木俊彰様はじめ、ご来賓の皆様のご臨席を賜り、友松会総会・研究発表会が開催できますことを心より感謝申し上げます。

今年度は湘南ブロック、鎌倉支部の皆様が実行委員として、事前から本日まで多岐にわたって準備を進められております。ブロックの皆様にも感謝したいと思います。

友松会は「後輩である学生の教員になりたい」という思いの実現に向け支援すること」、そし



て「先輩方が築いてこられた教育界への思いを引き継ぎ、より質の高い教育活動を求めた取組を応援すること」この二点に大きく力を入れています。具体的には7月、学校現場を経験されている皆様のお力を借りて教員試験合格に向けて「教員採用試験対策直前面接講座」を行います。またもう一つ「より質の高い教育活動を求めた取組への応援」として、現場の先生方を対象とした松沢研究奨励賞やその研究発表会を行っております。特に松沢研究奨励賞につきましては、若手の先生方をさらに支援していこうという取組を2年前から始めているところです。本日も第2部で2名の方が発表されます。このような取組を進めることができますのもひとえに会員の皆様のご理解とご支援のおかげです。

お手元の封筒に「友松第115号」とは別に「友松会の今」というプリントも入れてあります。そこに書かせていただいたように、新型コロナウイルス感染症拡大防止策のために、会員同士の顔を見合わせた関係づくり等、様々な取組が、約3年間滞っていた、できなかったことがありました。それに伴い、「会員にとって友松会が身近なものとして感じられなくなってきている」ことも危惧されているところです。

今やらなければならないことは、現役の学生にとっても現場の先生方にとっても、また、学校現場を離れている方々にとっても「友松会があってよかったな」という思いが共有できるようにすることだと考えております。お手元のしおりの巻頭言に「友松会の明日を共につくろう」と記しました。このことも実は今のお話と関連させて考えることができるわけです。会員の皆様と共に友松会の取組や活動を一歩ずつ進めてまいりたいと思っております。本日の友松会総会並びに研究発表会が皆様にとって有意義な時間となりますことを願い、挨拶に代えさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

▽来賓祝辞▽（要旨）

横浜国立大学学長・校友会会長

梅原 出 様

友松会総会開催おめでとうございます。

ここに、「つながる会員、つながる大学」というのがありますが、時間軸でつなげていくというのは大変なことだと思います。それがずっと続いていることは、素晴らしいことだと思います。大学の近況をちょっとだけお話しします。文部科学大臣表彰があり、令和6年度は本学から5人の先生が、若手科学者賞というのを取っています。15年間の統計を見ると、最初の10年間で5人しか出なかった。この5年間で、12人くらいの受賞者を出している。画期的なことで、若い先生が頑張ってくれています。本当に大学の活性度を計るよい一例かなと思います。教育学部も若手化を図っていて、基本的には助教の方を新任の先生としてお迎えしていて、理工系の先生でも社会系の先生と一緒に勉強するとか、そういう研究力を発揮していただけてかなり積極的な感じですよ。ちょっと昔の教育学部とは違うかなと思っています。若い先生が頑張っていると学生も一緒にがんばろうという気になります。教育学部も活性化が進んでいるということをお伝えしたいと思いました。



横浜国立大学教育学部長

友松会名誉会長 鈴木 俊彰 様

友松会の皆様には、日頃より温かいご支援・ご指導を賜っておりますこと心より御礼申し上げます。教員採用試験対策講座におきましては皆様からのきめ細やかなご指導を賜り、深く感謝申し上げます。また、横国Day「豊かな教育を考える会」シンポジウムで諸先輩方と世代や立場を超えて意見を交わすことができましたことは、学生たちにとって得難い経験であり、視野を広げる貴重な機会となったことを確信しているところでございます。

本学部では社会の急速な変化に対応する学校教育の現場が直面する多様な課題を踏まえ、未来を担う教員の育成に取り組んでいます。とは言え、教員就職率の低下という厳しい現実にも直面しています。オープンキャンパスを開催し改めて感じましたのは教員になりたい人が減っ

ているわけではないということです。現在、教職志望の高校生対象のセミナーを継続的に開催しております。昨日も「教員養成学部での学び」をテーマにしたセミナーを開催し、約100名の高校生が参加しました。彼らが高校生の段階で教員の意義や責任について考え、教職を志し、確かな意思をもって本学を目指してくれることを何よりも願っております。一方で教職への不安や戸惑いを抱え志半ばでその道をあきらめてしまう学生も少なくありません。こうした学生たちが自信と希望をもち、安心して教職を目指せるよう、友松会の皆様のお力もお借りしながら、教育的な支援をさらに強化していきたいと考えております。教育は知識や技術だけでなく人と人との信頼の上に築かれるものであります。引き続き友松会と教育学部が手を取り合い教育の未来を共に築いていければと願っております。



松沢研究奨励賞贈呈



左より 川崎市菅生小学校 総括教諭 西条 雅之
藤沢市立高浜中学校 教諭 大野 仁寛
(新設B部門) 横須賀市立衣笠小学校 教諭 布富 翔大

▽松沢研究奨励賞(A部門)研究発表▽

〈研究発表1〉[発表内容は友松115号に掲載]

川崎市菅生小学校 総括教諭 西条 雅之 氏
研究主題 よく考え 伝え合い みんなで学ぶ
菅生っ子～社会とすすんで関わる子を育てる授業づくり～

講評（要旨）

小林 勝弘 川崎市立西菅小学校長

○森林と社会科のつながり

森林減少の深刻さや自然環境と人間の営みのつながりを強調したい。2021年の森林火災や川崎市の面積との比較を通し、環境問題のスケール感を子どもたちに伝えることが重要である。

○西条先生の実践は以下4点を高く評価

(1)学習計画の立案

子どもたちの「知りたい・調べたい」という気持ちを引き出す導入の工夫が秀逸。驚きやギャップを活用し、主体的な学びを促していた。

(2)テーマ選択と個別最適な学びの追究

グループごとにテーマを選び、個別に調べながらも全体の学習問題に向かって進む構成が、社会科の特性を活かしていた。

(3)働く人の声の活用

例をあげ、森林に関わる人々の努力や工夫を取り上げることで、臨場感や切実感をもたらし子どもたちの理解を深めていた。

(4)「身近さ」への回帰

広い視点から始まり、再び「身近な場所」に戻る構成が学びの定着に効果的。授業の最後に「木質化だけでいいのか？」と問い直す姿勢も印象的であった。

○社会科を通じた子ども像の育成

社会科で子どもの何を育てたいかその姿を明確に提示したい。1・2年生は、「発見」。自分の町の魅力に気付くこと。3年生は「川崎市大好き」、地域や人への愛着。4年生は「県好きだよ」。生活を支える人々への理解と感謝。5年生は「広がり」。国への関心と感謝。6年生は「誇り」。歴史・政治・国際理解を通じた自国に誇りをもてるということだろう。



《まとめ》

社会科は、日常とつながりながら子どもたちの思考を深め、未来を考える力を育てる教科である。川崎市の研究の継続と発展に今後を期待したい。

(質問・感想)自分はこれまで「農業」「工業」がメインで「森林」の単元は軽く流していた。今回、「森林」の授業に感銘を受け、子どもたちの主体性を引き出す工夫に反省と学びを感じた。

(回答：発表者)個人やグループでテーマを選び、クラウドで可視化しながら調べ学習を進める方法や、教師の体験から小田原の森林組合との連携、地域体験の活用が紹介された。「菅生ブルー」は地域の青空を象徴する子どもたちの言葉で、公害学習の導入に用いられた。

〈研究発表2〉[発表内容は友松115号に掲載]

藤沢市立高浜中学校 教諭 大野 仁寛 氏

研究主題 学びを豊かにする生徒の育成

～わかる 使える 役に立つ～

講評 (要旨)

深津 礼子 藤沢市立羽鳥中学校長

今回の発表の優れた点は「グランドデザインの明確さ」と「ICTの効果的な活用」の点である。まず、グランドデザインについては、学習指導要領が掲げる「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の3本柱を、「わかる・使える・役に立つ」という具体的な目標に落とし込み、各教科で明確な目標設定を行っている。外国語科では、文法理解やパターンプラクティスによる「わかる」、文脈に応じた表現の選択による「使える」、実際のコミュニケーションでの活用による「役に立つ」を明示し生徒と授業の目的を共有している点が評価される。また、「話すこと」が「やりとり」と「発表」に分けられたことを受け、スピーチと質疑応答を組み合わせた授業が行われており、日常的な対話活動の積み重ねが生徒の即時的な表現力を育てている。教科横断的な活動や場面設定の工夫により、学びを日常生活に結びつける環境づくりも意識されていた。ただし、アンケート結果では「役に立った」と感じる生徒が少なかった。取組の深化が期待される。ICTの活用については、コロナ禍での一人一台端末の導入を契機にGoogleWorkspaceやロイノートなどを活用した授業を展開した。ICTを単なる目的とせず、学びを支える手段として位置づけた点が特に評価される。



今後の課題としては、生徒の主体性を促す仕組みづくり、対話的な学びの充実、そして深い学びの実現が挙げられている。特に「役に立った」と実感できる学びをどう増やすかが、重要なテーマである。

(質問) 生徒アンケートで「役に立った」の数値が低いとあるが、どのように改善したのか

(回答：発表者) 2022年に「役に立つ」の数値が低く課題となったので2023年の研究は「役に立つ」に視点を当て教科横断的に教科とのつながりを意識した授業を行ったが、蓋を開けたらよい数字が得られなかった。改めて基本に戻り、本校の「わかる」「使える」の視点から、日常の授業改善を図っている。